



▲国立の自然と文化を守る会 会長佐藤氏

伝統文化の継承が “郷土愛につながる”

国立の自然と文化を守る会

昭和42年、開発の波が多摩地域を押し寄せたことに伴い、先人が遺した生活や歴史の尊い文化遺産が失われかけ、それらを保護存知するために「国立の自然と文化を守る会」が設立しました。国立に住む子どもたちに「ふるさと意識と郷土愛をもってもらう」という想いから、現在も地域の自然と文化の大切さを市民に伝える活動を続けています。

国立の歴史について（概要）

その昔、南部に位置する谷保は、農業が盛んで、甲州街道を中心に民家が立ち並んでおり、明治22年、3村が合併し、国立市の前身の「谷保村」となりました。

大正時代末期、谷保村は数百戸の農家が点在するだけでしたが、箱根土地(株)によって山林であった北部の開発が進み、「理想の文教都市」を目指し、様々な変遷を辿ってきました。

その後、人口は増え、昭和26年に谷保村から国立町となり、昭和27年、文教地区の指定を受けました。そして昭和40年、富士見台団地の完成に伴い、人口が5万人を超え、昭和42年、国立市が誕生しました。このように国立市は南部と北部の地域が調和し、今日のような魅力あるまちとなっています。

国立の自然と文化を守る会（以下、「守る会」）が設立した経緯を教えてください。

昭和39年の東京オリンピック開催の影響で景気が良くなり、急速に都市化が進んだことで多摩地区の自然や文化の破壊が進んでいきました。当時の読売新聞がこのままでは多摩の自然と文化が消滅する恐れがあるとの懸念から多摩地区の各市町村に10万円を寄付し昭和42年（1967年）、「守る会」が発足されたと聞いています。歴代の会長は谷保

村住民で歴史、文化、芸術には精通した方ばかりです。

どのような活動をされているかを教えてください

活動は、板碑や仏像の調査、遺跡の案内用立札の設置、谷保天満宮の津塀改修工事とその費用捻出のための市内の文化墨客による作品展（2回）、また当時行われなくなっていた伝統行事の塞の神（どんど焼）や大瀬干しの復活など、国立市に住む子どもたちに「ふるさと意識と郷土愛をもってもらおう」という想いから、地域の自然と文化の大切さを市民に伝える活動を続けています。また、平成3年より会報の発行や市内各団体と連携による文化・自然活動、年数回の文化財の見学会など、ここに挙げる以外にも多岐に亘ります。

活動を継続されるにあたって工夫されたことを教えてください

当会は発足から56年もの歴史があり、会員は今でも100名を超えています。活動を絶やさないために定期的に集まり、次回、その先の活動の検討をしています。伝統文化というものは意識して守っていかなければ存続が難しいため、皆が学び続けることも、伝統文化を継承していくには大切なことです。

一方で、会員の高齢化や若い人の会員減少、そして国立の歴史を理解している会員の減少から、例えば伝

統行事である「どんど焼」など、事業として毎年開催はできていますが、その活動の原点（意味）を知る人が減っていく、つまり伝統を維持できなくなる可能性があります。地域の繋がりとという意味でも、交流の場を増やし、新たな会員を募って継続していきたいです。

国立市の自然や文化、伝統における街の魅力を教えてください

国立市は歴史ある地域（谷保村）と北部の開発で生まれた地域との融合であり、100年間何も変わることなく開発当時のまちや自然が保護されている点は魅力の一つです。また、谷保天満宮祭りなどで、地域に限らず住民の方の一体感が生まれてきたことも嬉しいですね。

今後の守る会の活動及び展望などありましたら教えてください

現在は谷保地区の有志の方の応援でいろいろな事業が展開できていますので、地元元気な高齢の方、そして若い方を誘い参加していただくことで、健康づくりや生きがいづくりに貢献できたらと考えています。一方で開発が進むと農家が減り、自然や文化の維持や当会の活動も難しくなってしまうので、今後も自然や文化を継承していくことの大切さを伝えていくとともに、当会員の皆様が楽しく活動ができますように、精一杯努力していきたいと思えます。